心身障害学研究,22,145-156,1998

資　料

聾に関する社会学的研究の可能性と展望

金　澤　貴　之*・吉　野　公　喜**

近年、手話言語学の進展に伴い、聾者を社会学的視点から捉えた研究が見られる。本稿はそれらを①文化人類学的アプローチ、②自叙伝的アプローチ、③社会構成主義アプローチの3つに分類し、それぞれの意義と今後の研究課題を提示した。

①はコミュニティの外部にいる聴者が記述するのに対し、②は内部にいる聾者が記述する点に両者の違いがある。しかしどちらも聾を民族的視点から捉えている点で共通しているが、③の場合、人々が聾をどう捉えるかという、人々の定義活動を記述するという点で、視点が異なる。

これらの研究の意義は「聾」が人々によって捉え方が異なることを示し、従来の病理学的な聾者観を相対化させたことにある。つまり、「聾」が聴者の専門家によって病理学的に「障害」として構築されていること、そして聾者自身は「聾」を「障害」として捉えていないことが明らかになったことにある。

キー・ワード：聾　社会学的研究　社会構成主義　言語的マイノリティ

1．はじめに

Stokoe (1960[43]) 以降、手話が1つの自然言語として捉えられるようになったことにより、手話を用いる言語的マイノリティとして聾者を社会学的視点から捉えた研究が見られるようになった。これらの研究に共通してみられる特徴は、社会学の中でも量的な社会調査法ではなく、人々の社会行動のありようを記述的に記録していくという質的調査法に基づいており、これまでの病理学的視点からの聾者に対する見方とはまったく異なる視点から捉えなおしているという点である。

従来は「聾」という状態を、本来ならば機能しているはずの聴力に障害があり、聴力がほとんどあるいはまったく失われている状態として捉えてきた。そしてその聴力の「損失」をどのようにして補完するかに関心がよせられていた。つまり、聾という状態を、本来あるべきものが失われた状態であり、克服すべき対象として扱ってきた。

それに対して、1970年代以降から次第に「聾」は社会学者の研究対象となっていったが、彼らの視点は聾を文化的視点から捉えようとするものであり、聾者を「障害者」としてではなく、手話言語を母語とする「少数民族」として捉えるものであった。本稿はそうした近年見られる社会学的な聾研究を概観、整理し、社会学的研究が聾を取りまく諸問題に対してどのような貢献をするのかについて考察することとする。

2．社会学的研究の3類型

聾者を対象とした社会学的研究には異なる立場から書かれたものが混在している。本稿ではそれらを便宜的に、1）文化人類学的アプローチ（anthropological approach)、2）自叙伝的アプローチ（autobiographic approach)、3）社会構成主義及び構築主義（(social) con-

*心身障害学研究科
**心身障害学系

structionism)[注1]の3つに分類し、それぞれの代表的な文献についてとりあげる。社会構成主義アプローチについては、その方法論自体のわかりにくさもあるため、本稿の中で特に紙面を割いて説明する。

文化人類学的研究とは、対象とするある社会的集団に、「よそ者」である調査者が一定期間入り込み、活動を共にしながら観察を行い（参与観察)、そこで感じとったことを記述していく方法である。聾を扱った研究の場合は聴者が聾コミュニティの活動を参与観察して行った研究ということである。

その反対に、自叙伝的研究はコミュニティ内部にいる者が自分の体験を内省的に記述したものである。これは、当人にとって当たり前のことが、コミュニティの外部にいる読み手にとって興味深いものとなるという点に価値がある。

社会構成主義は前述した2つのアプローチとはやや質を異にしている。というのは、前の2つの違いがリサーチの方法に見られたのに対し、この場合はものごとの捉え方自体が従来のパースペクティブとは異なっているからである。つまりはあらゆる社会現象を実在するものとして捉えるのではなく、人々の認識によって想定され、ディスコースによって社会的に作られた構築物として捉えるということである。この立場では、聾を病理学的なものとしても、文化的なものとしても想定しない。研究者がそれを自ら想定するのではなく、聾を病理学的なものとして構築している人々の活動や、あるいは逆に文化的なものとして構築している人々の活動を記述していくということである。

とはいえ、もちろんすべての社会学的研究がこの3つのいずれかに該当するわけではない。「聾を文化的視点から捉えた研究」の多くが質的調査法に基づいてされているという意味では、その時点ですでに社会学の伝統的な立場である実証主義的な研究を除外している。また、例えば質的研究の代表的な立場としてもはや一定の認知を得たエスノメソドロジー（ethnomethodology）[注2]については、筆者自身は十分聾研究に貢献しうる方法だと考えてはいるが[20]、現在のところ McIlvenny (1995[27]) が行っている以外はあまり見られないのが現状であるため、ここでは除外した。また、これらの文献は相互に影響しあっているものであるし、本来明確に区分すること自体が無理のある作業である。そのためここで行う作業は、あくまで理論的枠組みを整理していくための便宜的な作業である。

3．文化人類学的アプローチ

前述したように、文化人類学では外部の者による参与観察を基本とするため、聾コミュニティの成員でない聴者による観察に基づく。聴者が聾コミュニティに接触したとき、聴者の世界で当たり前だと思っていたことが、聾者の間ではそうではないという状況に遭遇する。そこに異文化に対する発見があり、その1つ1つを記述していくことで、「聴者から見た聾者の世界」が描かれる。

「聾者の世界」を描くならば、聾者自身が描けばいいかといえば、必ずしもそうではない。そのコミュニティの内部にいるものにとってはなんら「興味深い」世界でもなく、ごく当たり前の世界だからである。

しかしでは外部の者が描けばそれでいいかといえば、必ずしもそうではない。自分が「よそ者」として扱われている限りは、本音を聞くことができない。そこで、内部で行われていることを十分に理解するために、仲間として受け入れられる必要がある。そこに参与観察の意味がある。

調査者が対象と接触することは、調査者が対象に社会的影響を与えてしまいかねないという点から、対象のありのままの姿を捉えることが困難になるようにも思われる。しかしその反面、そもそも対象に接触しないで捉えようとすることは、対象のわずかな部分しか見ていないまま、理解したつもりになってしまうという危険性がある。その危険性を回避するためには、メンバーのリアリティに調査者のリアリティを近づけて

いく作業がやはり必要となる。しかしながら、それは調査者が対象の実像を客観的に記述しきれるということではなく、あくまでそれは調査者の描いたリアリティに他ならない。しかしその中に文化接触を持たない内部の者にも外部の者にも気づかなかった世界が描き出される。そこにこのアプローチの価値があるといえよう。

さて、では聾を対象とした文化人類学的研究で、どのようなことが明らかにされてきたであろうか。この分野の先駆的役割を果たしたのがErting（1978[7]）であり、それにHiggins（1980[14]）；Neisser(1983[29])、Reagan(1985[34]、1990[35]、1995[36])、Rutherford(1988[38]、1993[39])、Sacks (1989[40]) といった研究が続いた。彼らは聾者を手話言語を用いる「民族」として捉え、そのありのままの姿を捉えようとした。これらの一連の研究の成果は、聾者は聾であることを必ずしも「障害」とは思っておらず、少なくとも聴者が聴者的な価値観で想定するような悲壮な生活を送ってはいないのであり、聾であることをごく当たり前のこととして捉えているということが明らかにされたことである。つまり、聴者が聴者の世界の中で作り上げてきた聾者のモデル、すなわち病理的視点での「聾」と聾者自身が聾者の世界の中で捉えている「聾」とは異なるということが示されたといえる。[注3]

Erting(1985[8]、1987[9]、1994[11])はその後さらに研究を進めた。彼女は聾学校を1つの社会として捉え、そこで参与観察を行い、聾児をとりまく複数のグループ（聴者両親、聾者両親、聴者教員、聾者教員）の間に生じる文化的な衝突を示した。つまり、聴者教員は聾という言葉を聴力的な意味で用い、聾児を「異常」とみなし、聴児に近づけようとするのに対し、聾両親は聾を障害とは思わず、1つの生き方として捉える。そしてその差異の結果が文化的な衝突となるということである。Ertingの成果は「聾」ついてある別の角度からの見方を提供するだけにとどまらず、捉え方の異なったグループの接触する場所をフィールドとすることで、そこに生じるコンフリクトを明らかにしたことにあるといえよう。

日本においては、ごく最近になってようやく何人かの社会学者の関心を集め始めたところである。例えばましこ(1996[26])は知識社会学の立場から日本の聾コミュニティがおかれている現状を分析している。しかしその紙面の多くは読者が手話や聾者に対して持っているであろう誤解への解説に当てられており、聾コミュニティを本格的にフィールドとして扱ったものにはなり得ていない。聾をフィールドとして扱ったという意味ではわずかに斉藤(1997[41])が、それも学術的な関心としてではなくジャーナリストの立場から発表しているにすぎない。

4．自叙伝的アプローチ

文化人類学的アプローチが聴者の視点で書かれたものであるのに対し、こちらは聾者が自分のことについて記述していく研究である。前章で述べたように、聾者にとって聾者の世界はなんら特筆するに値しない、ごく当たり前のことであるため、聾者であれば誰でも書けるというわけではない。その困難性について木村（1996[21]）はこう述べる。

> ろう者であるわたしが「ろう者の民族誌」を書く、それは非常に困難を伴う作業だ。ろう者にとって「あたりまえのこと」が、聴者にとって「あたりまえでない」ということが往々にしてあるという。しかし、わたしには、ろう者にとって「あたりまえのこと」のうちの何が、聴者にとって「あたりまえでない」のかわからないし、ろう者にとって「あたりまえのこと」は、それこそ「あたりまえのこと」でありすぎて、何から手をつければいいのか途方に暮れてしまう。

そのためこの類の叙述を有意義なものにするためには、筆者に自分自身を内省的に観察できる能力と、聴者から自分がどのように映っているかを把握する能力が必要となる。

前章で示した聴者による外部からの観察的記

述の場合は、あくまで「聴者の目から見た聾の世界」であって、そこには異文化接触の視点という面白さはあるが、その反面それが確かな聾者の姿を映し出せるかどうかに疑問の余地は残る。一方、こうした聾者による内省的な叙述の場合、それが聴者から「あたりまえでない」研究になるかどうかは上述した筆者の能力に依存するが、そこには外部の視点ではつかみきれない、内部の視点による叙述のメリットがある。棚田（1996[45]）は「耳が聞こえないことは不便だけれど不幸ではない」というしばしば聴覚障害者について語るときに用いられる文を例に取り、それが「外部の視点における発想の転換」にすぎないことを指摘し、「内部の視点、つまりろう者の視点からすれば、『耳が聞こえないこと』は『当たり前』のことであり、ことさら『不便』だと思うこともない、というのが実感である」と述べている[注4]。「わたしはあなた方のことを誤解していませんよ」という、聴者の立場からのレトリカルな表現の効果を根底から無効化させてしまうこの言葉は、「内部の視点」の持つ力強さを示している。

そうした「内部の視点」からの叙述はしばしば聴者の行為に対し、皮肉の込もったアンチテーゼを投げかける。例えば聾学校の様子について木村（1996[21]）はこう語る。

> ところで、養訓の時間は生徒たちの協調性がいちばん発揮される時だ。読話訓練で、先生が何を言っているのか当てなければならない時には、読話のできる生徒があまり読話のできない生徒に、先生にばれないようにすばやく合図を送る。合図は手話だったり、皮肉にも身振りを交えた口話だったりする（ろう者の口話は、聴者のそれよりわかりやすい！）。

また「聾文化」という言葉を生みだしたのも、Padden and Humphries（1988[33]）及び Padden（1989[32]）による、聾者の視点からの研究からである。「聾者は聾の親の元に生まれた子どもの場合、文化を持つことができる」という一節は、その後「聾文化」の根拠としてしばしば取り上げられている。

5．社会構成主義アプローチ

5.1　社会構成主義と構築主義

社会構成主義に共通する基本的認識とは、「言語が世界を構成する」ということであり、社会学では Berger & Luckman（1966[2]）を源流とする（野口、1995[30]）。しかしこの考え方は社会学の中だけで起こったわけではない。Burr（1995[6]）によれば、これは「イギリスと北アメリカの心理学および社会心理学に現在浸透しつつある」もので、「単一の源をたどることはできない」という。この「言語が社会を構成する」という考え方は、何らかの実態を想定して、それを明らかにしようとする立場からすれば、ひどく奇妙なもののように思われる。しかしこの立場は、「社会には実態がない」というわけでも、「ある」というわけでもない。我々は「実態」をディスコースの中で想定していると言っているのである。

一方、考え方としては基本的には類似しているものが、社会問題論の分野で提起されたのが構築主義である。こちらは Spector & Kitsuse（1977[42]）によって提唱された。彼らは「社会問題とは、ある状態が存在すると主張し、それが問題であると定義する人びとによる活動である」と定義する。彼らは従来の社会問題論が社会問題を社会の状態として捉えていたために、いくつかの理論的な問題点を持っていたことを指摘する。その理論的つまずきとは、客観的な社会の状態の存在が実証されなければ、社会問題の実証ができないということである。そしてその問題を解決するために、ラベリング論を発展させ、より多くの経験的研究[注5]につなげようとした。

つまり彼らはこう考えた。社会問題を「社会の状態」として説明しようとすれば、まずその実態について明らかにするために膨大なデータを用いて「実証」しなければならない。しかし

そもそも社会問題は「社会の状態」ではなく、想定されたところの「社会の状態」に対して人々が行うクレイム申し立て活動である。実態のない「状態」であっても社会問題は起こり得るし、逆に何が起ころうとも、それを人々が「問題」としてクレイムを申し立てない限りはそれは社会問題にはならない。それならば、「社会問題とは何か」を明らかにするのではなく、「社会問題」を人々がどのようにして構築していくかということを明らかにするべきだ、と。

このように、社会構成主義と構築主義は「世界が言語によって作られる」と考える点では共通している。しかし社会構成主義が「ある問題が人々の間でどのようにして作られているのか」という状態を扱うのに対し、構築主義は「ある問題が人々の間でどのようにして作り出されていくのか」というプロセスに関心を寄せるという点が異なっている。

5.2 構築主義における論争点

構築主義はラベリング論の持つ理論的な曖昧さを解消することで、論争に巻き込まれない形で経験的研究につなげようとした。確かにその結果としてさまざまな分野において経験的研究が増えたといえるが、しかしその一方で、理論的矛盾が解消されたわけではない。Spector & Kitsuse (1977[42]) によって提唱された構築主義は、その後 Woolgar & Pawluch (1985[47]) による批判を受けることになった。Woolgar & Pawluch は、「存在論的ごまかし」という言い方で構築主義を批判した。構築主義者は状態を想定せずに問題を扱おうとしたにもかかわらず、実際には暗に問題を想定している、というのである。構築主義による経験的研究では、ある問題の定義過程を分析するが、その際に「問題の定義が A から B に変化した」とする。しかしそこで暗に「問題自体は変化していないが」ということが想定されている。状態を想定しないといっておきながら、実際には暗に想定しているのではないか、という批判である。そうした批判を受けることで、構築主義者は主に Ibarra & Kitsuse (1989[16]) に代表される厳格派と、Best (1993[3]) に代表されるコンテクスト派に分かれることになった。厳格派では、あくまで状態を想定せず、レトリック分析に焦点化させて研究を行おうとするものである。一方、コンテクスト派の場合は、クレイムの背景にある文脈を無視することはできないと考えるため、ある程度の状態の想定を認めながら研究を進めていこうとする立場である。厳格派の考え方は理論的には歯切れがよいが、その結果として問題構築の際に発せられるクレイムのレトリック分析に終始するのであれば、問題構築のプロセスを対象とした研究が行いにくくなってしまう。それは Spector & Kitsuse が提唱した時の目的である、社会問題の経験的研究を行いやすくするということからすれば本末転倒ともいえそうだが、理論的に突き詰めてしまえばそうならざるを得なかったのかもしれない。

5.3 社会構成主義による聾研究

社会学的視点から聾研究を行っている者の中で、何らかの形で社会構成主義の影響を受けている者は決して少なくはないと言える。例えば Erting の場合、基本的な方法論としては文化人類学的アプローチを採用し、積極的に社会構成主義と銘打って研究してはいない。しかし Berger & Luckman (1966[2]) を引用し、社会化のための最も重要なものあるいは道具として言語を位置付けている (Erting、1985[8]、1987[9])。さらに Higgins (1987[15]) は Berger & Luckman を参照して以下のように述べ、構成主義的なリアリティの捉え方に同意を示している。

> 聾の理解のための１つの社会的アプローチでは、その意味が作りあげられるものだということを認めている。聾の社会的リアリティは聾と聾者に出会う人々が与える聾と聾者への反応を通して構築される。その人々とは聴者の場合もあれば聾者の場合もある。

「聾」を実態としてでなく人々のディスコー

スによって作られる可変的な構成物として捉えるという意味では、構成主義者の考え方は文化人類学的アプローチに従って研究する者にとっても賛同できる考え方なのであろう。だからこそ、文化的視点という、病理学的視点とは「違う視点」で研究することが可能になる（仮に真実は1つだという立場に立って研究を行おうとすれば、病理学的視点を「彼らは『ほんとうの』事実が見えていない」といった形で全面否定するしかない）。

ただ異なるのは、文化人類学的アプローチの場合の視点は研究者自身が対象を違う視点から規定しようとするのに対し、構成主義者の場合はその対象を規定しようとする人々の活動に注目するという点である。

構成主義の立場から行った聾研究として、Foster（1989[12]）と、Lane（1992[23]、1995[24]）があげられる。Fosterは、「聾」が聴者と聾者との間で構築されていると主張する。人々にインタビューを行い、そこから人々が想定するところのものとしての「聾」を探りだそうとしたという点では、まさに構成主義的な研究といえる。しかしFosterの関心の中心は聾コミュニティの「聾」の捉え方に向けられているため、それならば、ErtingやHigginsも構成主義的な捉え方に共鳴しているわけであるし、とりたてて構成主義を押し出す意味があるかどうかに疑問が残る。

むしろLane（1992[23]）は上述してきたようなこれまでの質的社会調査とは違った方法を採ることによって、多くの人々の注目を集めることになった。それは、対象を聾コミュニティの活動ではなく（それも行ってはいるが）、むしろ聴者による専門家集団の構築活動としたということである。そのことで聾教育に関わる専門家が当たり前のこととして（普遍的な事実と思って）捉えているものを、実はそこにすでにある事実ではなく、専門家が専門家の間だけで作り上げられたものなのだということを示した。

またLaneはその後より一層構築主義を全面に出した論文を発表した（Lane、1995[24]）。ここでは「聾」には「障害」と「言語的マイノリティ」という2つの構築があるということ、そして両者の構築のされ方をそれぞれ説明しながら、前者から後者へと構築のされ方が推移しつつあると述べている。

しかしながら、Laneの論証に問題点がないわけではない。彼は「障害」と「言語的マイノリティ」という、「聾」をめぐる2つの構築の推移を記述しようとしていながら、個々別々のアリーナによる構成を明らかにしたことにとどまっている。つまり聴者による専門家集団では「障害」として、聾コミュニティのメンバーの間では「マイノリティ」として、「聾」を構築しているということは示しているが、前者から後者に、どのようなディスコースをたどって推移したかのプロセスについては明らかにされているとはいえない。

Laneは社会的構築の例として「アルコホリズム[注6]」や「児童虐待」や「ホモセクシュアリティ」といった、構築主義による経験的研究の代表的なものをあげている。しかし聾に関するディスコースの場合、そうした社会問題と異なり、マスメディアのような公的な場（public arena）で活発に行われるわけではなく、個々の学校の職員間の会議のようなクローズドな場で行われている。そのため、「聾」の構築を明らかにしようとするならば、公的な場よりもむしろ聾学校の職員会議のような非公開の議論を対象とし、そこに見られる一連のディスコースを分析することが不可欠となる（金澤、1996 b[18]）。

ここにこそ「聾」の構築主義研究の困難さがあると同時に、構築主義研究への新たな視点を提供する可能性もある。これまで構築主義では、調査者自身が社会のメンバーの「言語ゲーム」に参加することを避けようとするあまり、マスメディアによって提供されるディスコースのような、調査者が関与せずに入手可能なデータを対象として扱ってきた。朝倉（1995[1]）のように、そこを構築主義の限界として捉え、クローズドな場でのフィールドワークはエスノグラフィとして記述する者もいる。

しかし筆者はそうは考えない。中河(1995[28])の指摘するように、「積極的な（コミットした）参与観察は、実践的および倫理的な困難をより多く招きこむかもしれない」が、「問題はあくまで、理論的営為の中身（およびそれを構成する研究者のバウンダリー・ワークのあり方）」であり、「さらに、調査者が『コミットをしない』調査モードを選んだとしても、調査者自身が『社会』という社会問題の舞台の登場人物である以上、その選択が実践的および倫理的問題への免疫を保障しないことは自明」のことなのである。だとすれば、メンバーの活動にコミットすることを恐れるあまりに構築主義アプローチの役割を狭めるよりは、むしろクローズドな場で構築される「問題」の特徴を明らかにすることで、社会問題論に新たな理論的枠組みを提供していくことを考える方が建設的であろう。例えば非公開の場でのディスコースを取り上げ、そこで発せられる発話がなぜクレイムとして成立しにくいのかを分析することで、クレイムがクレイムらしく成立するための条件を明らかにできる可能性が存在する（金澤、1996 a[17]）。そのために聾学校という非公開の場をフィールドとして構築主義研究を行うことは十分に意義深い。

クローズドな場でなされる「聾」の構築主義研究として、筆者は特に「指導法」に着目することを提案したい。聾学校では聾児の想定された状態について、常に「問題」が提案される。しかし教員の役割は単に問題クレイムを申し立てるだけではなく、同時にその問題を、「指導の改善」という形で解決させようとする立場でもある。したがって彼らの議論は常に［問題の提案⇄解決案の提示］の繰り返しとして行われ、それが「問題」の構築としてではなく、「指導法」の構築として行われる（金澤、1996 b[18]）。すなわち、ある特定の学校の指導法の構築過程に迫ることで、「聾」がどのようにメンバーの間で定義され、その定義がどのように変化していくのかを明らかにすることができる。

6．社会学的視点による聾研究の今後の課題

聾を対象とした社会学的研究として、特に社会構成主義を中心に質的研究について概略してきた。最後に、これらの研究が今度どのような形で貢献しうるのかについて考察する。

本研究で概略した研究に共通してみられることは、従来の聾者観（病理学的な見方）を相対化していることである。その上で、新たな別の視点からの聾者観を提供している。文化人類学的アプローチや自叙伝的アプローチでは、聾を手話言語を用いる言語的マイノリティとして捉える。そしてそこで描き出された聾者の世界は、聴者に対して新鮮な驚きを与えるものであった。聾研究の最大の功績はおそらく「聾者にとって聾であることは『障害』ではなく、ごく当たり前の世界なのだ」ということを示したことであろう。

一方社会構成主義アプローチでは、聴者の「活動」を対象として扱うことができる。聴者が当たり前と思って疑わない「事実」を、自らが構築した活動の結果として示すことになる。聴者は「聾は障害である」と思っている。しかしそうではなく、「『聾は障害である』と思って行う聴者のさまざまな活動によって、聾は障害として定義される」のである。端的に言えば、我々が「障害」として定義するから、聾者は「障害者」になるのである。このアプローチの場合、特に専門家の社会的活動を可視化させた点が重要であろう。聾学校教員や、聾教育研究に携わる「専門家」は、自らが聾について語る立場にあっても、逆の立場になることはなかった。ところが「聾について語る者によって問題は作られる」とすれば、「聾という問題」を生みだしているのは、他ならぬ専門家であるということになる。そしてそれは前段の文化人類学的アプローチや自叙伝的アプローチと併せて考えるならば、「聴者の専門家は、『聾』を、聾者が望んでいないような視点で定義している」ということになる。そうした構築が「正しい」のか「正しくない」のかは社会学者が決めることではなく、関わるメンバー自身が決めることである。とはいえ社会学者の関与によってメンバーの行

動が可視化されることで、メンバー自身が自らの行動を相対的な価値観に基づくものとして再構成することができる。ここに社会構成主義の果たす役割がある。

最後にこれらの研究の今後の可能性について述べる。文化人類学的アプローチや自叙伝的アプローチではこれまで「聴者の知らない聾の世界」を明らかにすることに意味があった。しかし今後はさらに複雑なテーマを明らかにしていくことが求められる。

例えば聾と別の何らかのマイノリティとの接触の問題があげられる。Rodriguez & Santiviago (1991[37]) のように、聾でありヒスパニックであるということ、あるいはKleinfeld & Warner (1996[22]) や日本では高嶋 (1996) のように、聾であり、同性愛者であるということといった、2重のマイノリティであることがどのようなことを意味するのかについて、今後十分に研究する余地があるだろう。

あるいは、いわゆるエスニックと、聾コミュニティとがどのように異なっているのかについても今後の研究が期待される。聾コミュニティは以下の3つの点で、他のマイノリティにはないプレッシャーを受けるとWoodward (1982[46]) は指摘している。1）医学・病理学的に捉えられるため、「劣った者」とみなされる。2）聾両親の元に産まれる聾児は10%以下であるため、ほとんどの聾児は異なる文化集団に属する。3）聾コミュニティの第一が、マジョリティの言語と、コードストラクチャの点だけでなく、チャンネルストラクチャの点でも異なっており、2重に深刻な言語的抑圧がある。それゆえに、聾コミュニティは他のマイノリティ以上の抑圧を受けることになる。この問題は今後より一層具体的な研究の中で実証されていくことが求められる。

一方、社会構成主義アプローチによる聾研究の場合は、まだ経験的研究がほとんど行われていないのが現状であるため、まずは経験的研究の積み重ねが求められる。しかしそれと同時に論争の途上にある構築主義の理論的枠組みに対し、「聾」を対象とすることで新たな進展を与えることも可能となる。例えば前章で述べたように、クローズドな場で問題が構築されるという固有性から、「クレイムとは何なのか」「アリーナとは何なのか」といった一般理論の構築に寄与することが考えられる。また、そこで見られるレトリックを分析する（金澤、1996 c[19]）ことでIbarra & Kitsuseの提案に経験的に答えていくことも可能であろう。

あるいはWoolgar & Pawluchによる「存在論的ごまかし」という批判に対し、経験的研究の中から答えていくという方法もあり得る。つまり複数の可変的な定義を同時に扱うことで、定義の変化の前提となる概念をもまた「状態」として規定しない研究を行うということである。具体的に言えば、「聾」は「障害」から「言語的マイノリティ」へと定義が変更しつつある（Lane、1995[24]）が、「障害」もまた社会的構築物として捉え、「障害」であることをむしろポジティブに捉えていこうという動きが見られる（Bogdan、1977[5]；Birenbaum、1979[4]）。「聾者」は「障害者」という定義を拒否することでポジティブに生きようとし、「障害者」は「障害」というカテゴリー自体をポジティブなものに変更しようとしている。ここに定義するものとされるものとが互いに社会的構築物であるという現象を見ることができる。そうした現象を扱い、「（状態は変わらずに）問題の定義が変わった（だけだ）」というパターンを脱却し、「ある定義の変更によって別の定義が変わった」といった研究スタイルをとることで、状態を（暗示的にも）テーマとしない研究が可能であろう。

本稿で取り上げた社会学的研究には、今後も以上のような新しい研究課題を見いだすことができる。しかしながら、こと日本に目を向けてみると、聾コミュニティを本格的なフィールドとして取り上げた研究自体がほとんどないのが現状であり、ようやく社会学者がこの問題に関心を示し始めたところである。理論的にも実証的にも、まだ端緒についたところであるといえよう。

注1）社会構成主義と構築主義とは、本文中で述べるように一応の違いはあるが、その違いは必ずしも厳密なものではない。本稿ではSpector & Kitsuse（1977[42]）以降に社会問題論の中で提起された立場に言及する時にのみ「構築主義」と記し、それ以外の場合には両者を包括して「社会構成主義」とする。

注2）エスノメソドロジーはGarfinkelによって提唱された、「象徴的相互作用論と並んで、20世紀アメリカ社会学の新潮流を形成した研究的立場」[13]である。従来の社会学が「科学知」に向けられてきたのと異なり、人々が何気なく用いている「日常知」に向けられる。詳細はLeiter（1980[25]）を参照。

注3）文化人類学的アプローチによる聾研究の詳細はErting（1994 a[10]）を参照。

注4）「耳が聞こえないこと」が「不便」でないのは、あくまでも先天性の聾者にとってであり、中途失聴者にとっては「不便」に違いないと思われるかもしれない。しかしここで注意が必要なのは、病理学的視点からの聾の定義と文化的視点からの聾の定義とでは、視点が違うだけでなく、当然対象も異なっているということである。つまり病理学的視点では失聴の時期に関係なく「聞こえない」ということで聾者が同定されるが、文化的視点では聴力の程度に関係なく、文化的に聾であるかで聾者が同定される。それゆえ中途失聴者は病理学的には聾者であっても、聴者文化の中で育っているため文化的には聾者にはならない。そのため中途失聴者が「耳が聞こえないこと」を「不便」だと感じるのもまた「当たり前」のことなのである。

注5）構築主義では、理論的研究に対して、具体的な個々の事例から理論を例証していく研究を、実証主義との誤解を防ぐためもあり、「経験的研究」と呼んでいる。本稿では特に理論的仮説を経験的研究によって帰納的に証明することを特に指す場合以外は経験的研究とする。

注6）“Alcoholism”を日本語にする場合、「アルコール依存症」という言葉は「『結局はアル中のことか』と翻訳された途端にスティグマを蘇らせる」と野口（1996[31]）は指摘する。本稿では野口に従い、「アルコホリズム」とした。

引用文献

1) 朝倉景樹(1995)登校拒否のエスノグラフィー．彩流社．

2) Berger, P. L. & Luckman, T. (1966) The construction of reality, A treatise in the sociology of knowledge. Harmondsworth, England, Penguin；山口節郎訳(1977)日常世界の構成．新曜社．

3) Best, J. (1993) But Seriously Folks: The Limitations of the Strict Constructionist Interpretation of Social Problems. in G. Miller & J. A. Holstein (ed.), Constructionist Controversies: Issues in Social Problems. New York, ALDINE DE GRUYTER, 109-127.

4) Birenbaum, A. (1979) The Social Construction of Disability. Journal of Sociology and Social Welfare, 6 (1), 89-101.

5) Bogdan, R. & Douglas B. (1977) Handicapism. Social Policy, 7 (5) 14-19.

6) Burr, V. (1995) Introduction to Social Constructionism. London, Routledge；田中一彦訳(1997)社会的構築主義への招待―言説分析とは何か―．川島書店．

7) Erting, C. J. (1978) Language policy and deaf ethnicity. Sign Language Studies, 19, 139-152.

8) Erting, C. J. (1985) Cultural Conflict in a School for Deaf Children. Anthropology and Education Quarterly, 16 (3), 225-243.

9) Erting, C. J. (1987) Cultural Conflict in a School for Deaf Children (with an Editor's Introduction). in Higgins, P. & Nash, J. (ed.), Understanding Deafness Socially.

Springfield, Illinois : Thomas, 123-149.

10) Erting, C. J. (1994) An Anthropological Approach to the Study of the Communicative competence of Deaf children. In Marina McIntire (ed.), The Acquisition of American Sign Language by Deaf Children. Silver Spring, MD, Linstok Press, 173-195.

11) Erting, C. J. (1994) Deafness, communication, Social Identity : Ethnography in a Preschool for Deaf Children. Silver Spring, MD, Linstok Press.

12) Foster, S. (1989) Social Alienation and Peer Identification : A Study of the Social Construction of Deafness. Human Organization, 48 (3), 226-235.

13) 濱嶋・竹内・石川編 (1997) 社会学小辞典［新版］. 有斐閣.

14) Higgins, P. C. (1980) Outsiders in a hearing world. California, SAGE Publications.

15) Higgins, P. C. (1987) Introduction. in Higgins, P. & Nash, J. (ed.), Understanding Deafness Socially. springfield, Illinois : Thomas, vii-xviii.

16) Ibarra, P. and J. I. Kitsuse (1993) Vernacular Constiuents of Moral Discourse : An Interactionist proposal for the Study of Social Problems. in G. Miller & J. A. Holstein (ed.), Constructionist Controversies : Issues in Social Problems. New York, ALDINE DE GRUYTER, 21-54.

17) 金澤貴之 (1996a) クレイムはどのように発せられるか. 現代社会理論研究, 6, 43-50.

18) 金澤貴之 (1996b) 言語指導法をめぐるディスコースに関する研究—A ろう学校における『聴覚手話法』構築過程を中心に—. 東京学芸大学教育学研究科修士論文.

19) 金澤貴之 (1996c) 聴者による聾者のための学校. 現代思想　臨時増刊号, 24 (5) 34-39.

20) 金澤貴之 (1997) コミュニケーションと抑圧. http：//hydra.rikkyo.ac.jp/～ohtake/kana/.

21) 木村晴美 (1996) ろうの民族誌. 現代思想 臨時増刊号, 24 (5), 200-211.

22) Kleinfeld M. S. & N. Warner (1996) Variation in the Deaf Community : Gay, Lesbian, and Bisexual Signs. in C. Lucas (ed.). Multicultural Aspects of Sociolinguistics. Washington, DC, Gallaudet University Press, 3-35.

23) Lane, H. (1992) The mask of benevolence : disabling the deaf community. New York : Knopf.

24) Lane, H. (1995) Constructions of Deafness. Disability & Society, 10 (2), 171-189.

25) Leiter, K. (1980) A Primer on Ethnomethodology. Oxford University Press ; 高田真知子訳 (1987) エスノメソドロジーとは何か. 新曜社.

26) ましこ・ひでのり (1996) おとのある世界／おとのない世界—少数言語日本手話をとりまく社会環境. 解放社会学研究, 10, 135-162.

27) McIlvenny, P. (1995) Seeing Conversation : Analyzing Sign Language Talk. In Have, Paul ten & Psathas, George (ed.) Situated Order : Studies in the Social Organization of Talk and Embodied Activities. University Press of America, 129-150.

28) 中河伸俊 (1995)「天皇表現」をめぐる三者関係型過程—「T 県立近代美術館問題」の構築主義的考察—. 富山大学人文学部紀要, 23, 33-58.

29) Neisser, A. (1983) The other side of silence : sign language and the deaf community in America. New York, Alfred A. Knopf.

30) 野口裕二 (1995) 構成主義アプローチ—ポストモダン・ソーシャルワークの可能性—. ソーシャルワーク研究, 21 (3), 28-34.

31) 野口裕二 (1996) アルコホリズムの社会学：アディクションと近代. 日本評論社.

32) Padden, C. (1989) The deaf community and the culture of deaf people. In S. Wilcox (ed.), American Deaf Culture. Burtonsville, MD : Linstok Press, 1-16.

33) Padden, C. & Tom H. (1988) Deaf in America : voices from a culture. Cambridge, MA : Harvard University Press.

34) Reagan, T. (1985) The deaf as a linguistic minority : educational considerations. Harvard Educational Review, 55 (3), 265-277.

35) Reagan, T. (1990) Cultural Considerations in the Education of Deaf Children. in Moores, Donald F. & Meadow-Orlans, Kathryn P. (ed.), Educational and Developmental aspects of Deafness. Gallaidet Univ. Press, 73-84.

36) Reagan, T. (1995) A Sociocultural Understanding of Deafness : American Sign Language and the Culture of Deaf People. International Journal of Intercultural Relations, 19 (2), 239-251.

37) Rodriguez, O. & Maria S. (1991) Hispanic Deaf Adolescents : A Multicultural Minority. Volta Review, 93 (5), 89-97.

38) Rutherford, S. D. (1988) The culture of American deaf people. Sign Language Studies, 59, 129-147.

39) Rutherford, S. D. (1993) A Study of American Deaf Folklore. Silver Spring, MD, Linstok Press.

40) Sacks, O. (1989) Seeing voices : a journey into the world of the deaf. Berkeley : University of California Press.

41) 斉藤道雄 (1997) 誤解されている少数言語「手話」. 中央公論, 1354, 146-157.

42) Spector, M., & J. I. Kitsuse (1977) Constructing Social Problems. Menlo Park, CA, Cummings ; 村上直之, 中河伸俊, 鮎川潤, 森俊太訳 (1990) 社会問題の構築—ラベリング論を越えて, マルジュ社.

43) Stokoe, W. (1960) Sign language structure : An outline of visual communication systems of the American deaf. Studies in Linguistics Occational Papers, 8, Washington, DC, Gallaudet University Press.

44) 高嶋拓志 (1996) ろうであること, ゲイであること. 現代思想 臨時増刊, 24 (5) 267-269.

45) 棚田茂 (1996) メディアとろう者. 現代思想 臨時増刊, 24 (5), 137-141.

46) Woodwaed, J. (1982) How You Gonna Get to Heaven If You Can't Talk With Jesus : The Educational Establishment vs. The Deaf Community. in James Woodward, How You Gonna Get to Heaven iF You Can't Talk With Jesus. Maryland, T. J. Publishers, 11-19.

47) Woolgar, S. & D. Pawluch (1985) Ontological Gerrymandering : The Anatomy of Social Problem Explanations. Social Problems, 32, 214-227.

Bull. Spec. Educ. 22, 145-156, 1998

An Overview and Potential Benefits of a Sociological Approach to Deaf Studies

Takayuki KANAZAWA, Tomoyoshi YOSHINO

In recent years, there has been more interest in deaf studies from sociological perspectives which are attributable to the progress of sign linguistics. In this paper we classify these sociological studies under three approaches: anthropological approach, autobiographic approach and social constructionism approach. Finally, we discuss potential benefits and problems growing out each methodologies.

While anthropological deaf studies are described by hearing persons as outsiders in deaf community, autobiographic deaf studies are done by deaf persons as insiders. However, here is a point in common between these studies in respect of regarding deafness as ethnic minority. Social constructionism approach is different from above two approaches, since it focuses on the activities in which people define 'deafness'.

Such approaches illustrate that 'deafness' can be defined from a different perspective than the traditional view of deafness as 'disability'. That is, while deafness is constructed as 'disability' by hearing specialists, deaf people themselves do not regard 'deafness' as 'disability'.

Key word: deafness, sociological study, social constructionism, linguistic minority